思っている。ときどき、

何か調べ

れ近くバラ売りされる はずであ

のバラ売りはしていないが、いず

ることがあって、

「山」の合本を

じんの記事はそっちのけで、 ひっくりかえしているうちに、

ほ 肝 の合本くらい面白いものはないと

山に関する刊行物で私は「山」

はないらしい。 しばある。これは私一人のことで たつのも忘れてしまうことがしば 記事に眼がすい寄せられて時の 内外の登山界のそのときどき 人間関係、 史

俗、

その

ほ カン つあり 登山

以前

の年配者はな

カン

な

山岳図書、

〇〇号を迎え

崎 安

あわせようとしたことが

いたので、

交互に出

で月刊になっ できたが、

Ξ

種を取ろうと

山 治

こには数知れず埋もれている。 録として発行した。まだこれだけ とあらゆる山に関する事項が、 号から一○○号までの合本も付 覆刻本を出版したおり、会報の さきごろ大修館で日本山岳名著

刊だから半世紀近い年月がたってのラインに達した。昭和五年の創

正

が いよ

いよ四〇〇号

いるわけだ。

山岳会の、

というよりもっと広

思う。 る。また近く第二期の名著覆刻版 を手もとにそろえるよい機会だと 出すことになっており、 号から二○○号までを覆刻して るが、この付録にも会報 古い会報 $\overline{\circ}$ の記事は駄目で、もっと幅の広

ことに会報の編集は大変である。 れ忙しいことに変わりはないが、 会の仕事のうち、どれもそれぞ は隔月発行で、 わりにの んび

不確定多数の読者を対象としなけ が、やはり東京支部報と、

ある。 信だの、会務報告だの、 ところが、 内容もまた、 会プロパ

いう題名では都合が悪い。 ればならず、そのためまず会報と

そこで

Щ,

という題名に変えたわけで

と何度も交渉した。 とか三種にしたいと、 かりはよく、 が二人いて、 時代、小方全弘氏が、神田の郵便局 しとにかく、 いものでなければいけない。 話はスムーズに 若い方の人はもの 郵送料の関係から何 窓口に担当者 向井ビルの しか 進

では、内容からいってもうまくな い。それから三種を取るとなると 京支部報というものが発行されて た。最初は当時東 辻つまを あった いう とかして下さいとお願いしたが、 ころ郵政省に顔がきいたので、 ウンといわない。 とになった。 らするらちルームは湯島に移って しまい、またやりなおしというこ 今度は本郷の郵便局へ日参する 応窓口を通せとのこと。 松方会長がその そうこ 何

> ミスがないと、 手紙をいただいて、

おほめの言葉があ

今月の会報

た。その号は本業の方が多忙だ

たのには閉口した。

しかしいつだ

珍らしく加納さんから

お

ち赤字を入れて返送されてこら

れ

などことにやかましく、いち

V

丹部氏などの尽力によるものであ つ と三種郵便物の認可がおりた。 私が会報の編集に関係するよう

てこられなくなった。若気の

いた

といま反省している。

んなミスがあっても、

何とも

9

し上げたところ、それから後はど はこれこれしかじか、とご返事申

日が続き、伊倉理事の骨折りでや

ったが、 今日までつかずはなれずの縁とな のが運のつきであった。それから やっとなおって、 八一号からで、二年ほどの大病が になったのは昭和三十年九月、 たとき、 渡辺公平氏につかまった 多くの会員各位と知り ぶらぶらしてい あ

昭和53年(1978年)

10月号(No. 400) 日 本山岳

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

次

『山』400 号を迎えて (山崎安治) ……(1) アルプスの星・エーデルワイス を訪ねて(坂倉登喜子) ………(2) 昭和52年年次晚餐会 「この一本展」より(下) ……(2) 三井松男さんの思い出 — 7 回忌にあたって-(金山淳二) ………(3) 図書紹介 ……(4) 「日米環境会議 '78」 について ……(5) 海外山岳会情報・その1 ……(6) アメリカの山岳団体 (鈴木敦之) ルーム基金応募者ご芳名 (14)……(東西南北(8) 会務報告・ルーム日誌など ………(10) カット/松本慎太郎・梅谷隆三

▶日本山岳会事務取扱時間

月,火,木,土曜 10時~20時 水,金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み ▶図書室開設時間

もいたしかたないと思っている。

亡くなられた藤島さんや、

加納さ

日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時~20時

下ろしてしまうのだから、多か

れ

ても校正で、何しろ再校だけで

会報の編集での悩みは、

喜こんでいる。

集していたおかげだと、

ひそかに 会報を編

えるように

なっ

たの

P

少なかれミスはある。

これはどう

担当の小倉厚氏は、 に誤植があった。こちらは気が 鳴りこまれてめんくらった。 話でたたき起こされた。成瀬さん かなかったのだが、 秩父宮殿下のご本のことで、見出 らで、 それからいま一つ思い出すの 「お前は切腹しろ」と怒 ある朝突然電 ご本人が不在 直 接 2

三は持ち帰ろう

すませてしまった号であった。

たため、手を抜き、

初校だけ

せばよいのに、

お礼とともに、

実 ょ で

しかった。 前の号の話なので、ことはややこ れはその月の号ではなく、ひと月 に校正恐るべしである。しかもこ し、大変な物いりであった。まさ とうとうそのページだけ作りなお らずびっくり仰天されたらしい。 しに怒鳴られて、何が何やらわか 奥さんが成瀬さんから頭ごな

度は小倉氏にお願いしたが、うま ○号ごとの総目次作りである。今 会報の仕事でやっかいなのは五

> くしたもので、そのとき、 そのと

御協力をお願いしたい。 員の協力なくしては、スムーズに をじかに密接につなぐ動脈のよう 動くものではない。各位の一層の な重大な役割りを持っている。会 会報「山」こそは、 会と、会員

で感謝にたえない。二〇〇号のと きにボランティアーが現われるの いた。最もくわしい総目次であっ きは沼井鉄太郎氏に作っていただ

7 ルプスの星

エ ーデルワイスを訪ね て

坂 倉 登 喜 子

亜

昭和二年、

亜細亜写真

大観社発行

第二回ヨーロッパ・アルパイン・ なれた。 シュッシュッとゆっくり走ったの 列車に乗って、緑の高原をポッポ 寄り、蒸気機関車の赤くて可愛い だということで、ブリエンツに立 保存の意味で姉妹会社の手を結ん らだろうか、とても嬉しかった。 ワイスの花をプレゼントしてくれ 中ホテルの奥さんの出迎えを受け エーデルワイス・ホテルへ向う途 はお伽の国に行ったような気分に と、日本の大井川鉄道が共にSL 好きだということを知っていたか 宿に着くと、私に一本のエーデル た。去年私がエーデルワイスが大 ブリエンツ・ロートホルン鉄道

りないようだった。

私たちはまずグリンデルワルト

るのが目的という旅は多いが、

遥

観光旅行で山を眺め、写真を撮

との再度の出合いであった。 ね、清く優しく根強く咲き誇る花 イスの 国花エーデルワイ スを 訪 ツアーの目的は、

前回と同じくス

々と、花を訪ねるという旅はあま

スの花束(会員が造ってくれた造 その帰りに日本のエーデルワイ

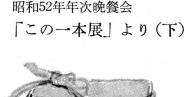
ことを教えられた。

その翌日ミューレンに移動して

ワイスの花を一本いただいた。そ から、そこに咲いていたエーデル 主人のお墓参りにきていた未亡人 教会を訪れた。ちょうどその時ご に着いてその翌朝早く町はずれの

してそこに田口さんのお墓のある

(下)



細 亜 大 観

これまた一般に知られていない貴重な文献であ 年にかけて、ネパールをへてのチベット入りに ものであろう。文教師が巻頭に大正元年から二 ので、全部原画で、印刷ではなく極めて珍しい ついて「西蔵の思ひ出」と題し述べているが、 パールの写真集である。「西蔵遊記」(大正九年 社から六回にわたって発行されたチベット、ネ 十月発行)の著者青木文教師の撮影になったも これは当時大連(満州)にあった表記の出版

記」の十九ページにも載っているが、原画なの 明にとらえ、文教師の所蔵するチベット入国旅 も、大正初期のチベットや、ネパールの写真が ではるかに鮮明で、判読できるほどである。 券などことに注目される。この写真は「西蔵遊 ラッサを中心としたチベットの風俗、風物を克 写真説明も文教師のもので、いずれにして 写真は、第十三世ダライ・ラマから始まり、

> い持参した次第である。 面の研究に何らかの役に立つのではないかと思 原画のまま残されてあることは、 今後のこの方

山 崎 安 治

石神井より見ゆる山 橋予科会雑誌より

もいないのではないかと思う。 で、多分私の仲間でこれを持っているのは一人 の図書館か、如水会館の資料室ぐらいのも にお目にかける一橋の予科会雑誌・第六号、こ 年である。この年に槇さん達はカナダのアルバ は大正十四年のことで、西暦に直せば一九二五 んなものをいまだに保存しているのは一橋大学 ータへ行き、私は日本山岳会に入会した。ここ 橋の予科から本科へと言えば、私にとって

たからである。 は私にとって掛け替えのない大事な記念品だっ ていたか、どう考えても不思議なのだが、それ んな穢ないものがいつまでも私のところに残っ やらいろいろ有為転変をくぐりぬけて、何故こ われわれの予科会雑誌が何故こんな厄介な型 私はこれを五十二年間持ち続けてきた。

間であったからであると思う。 も不思議の一つだが、多分これの当時の編集委 の山のスケッチを口絵に入れてくれたか、それ 員たちが私と同じ年の予科に入ったいたずら仲

についているので、それを読めばこの絵の出来 れわれにとって誠に「古き良き時代」であっ た所以は理解出来よう。五十二年前と言えば 目次を見ればわかるように、解説が後ろの方

あった火の見櫓の天辺に度々挙じ登り、武蔵野 予科時代の最後の冬、私は石神井駅のそばに

ことになった。 けてびっくり、劇的シーンという 呈したら、頰にキッスの答礼を受 を駅長さんに親善の意味で贈

フィンデルン・アルプのウンター したりして、スイス山岳会の方々 共にし、歌とプレゼントの交換を 長さん等二、三人をお招きして、 と親交を深めた。 モンテローザ・ホテルでお食事を 今年も去年と同じガイドと共に ツェルマットでは今年も郵便局

ロート・ホルンの斜面で、エーデ



中国点領

本当に幸だと思った。 ジした皆さんにも見ていただけて 出会いを楽しみ、メンバーチェン ルワイスの花園を見つけ、再度の

まで登ることができた。 数以上のメンバーがヘルンリ小屋 所氷結した雪渓があったが、約半 マッターホルンの登山路は一ヵ

ンバーの一人を安全な場所まで助 岩に触れさせたり、心臓の悪いメ さんを小屋の上まで連れて行って されたお兄さんのために、その妹 六年前にマッターホルンで遭難

Ш

ドの人情深さに感激の涙を流し けて下山させたり、スイスのガ 1

の美しさが、スイスの自然の美し さを守っているように さえ 思え スイスの国柄の良さと、人の心

るいするほどだった。 凄さに驚きの眼を見張って、身ぶ 大氷河の末端を踏んで、青氷の物 ランに遊び、ミディの展望台から 下って、モンタンベールへ歩き、 最後のシャモニではラック・ブ

ことに対し感謝の意を表したい。 皆様のご指導で良い山旅のできた を心から喜びたい気持であった。 間の山旅を天候に恵まれ、メンバ ての友情に結ばれ、幸せな十五日 参加者も最後は親しい山仲間とし ンの酔いに歌も飛び出し、未知の 三人のお誕生祝いもかねて、ワイ でお別れパーティ、三十六名の内 湖畔の夕風に触れ、素的なホテル ーの協力で無事に終了できたこと JAC誌上でのご後援や先輩の 帰りはジュネーブに出てレマン

より

本展

学生時代東京に住んでいた若き日の私の憶い出 ないのは少し角度がちがうからである。これも て入っているつもりである。 のものの亜の亜流だが、大山から笠山までは総 の甲で横に拭き乍らこの絵を画いた。木暮さん 富士山の下に丹沢山塊の最高峰、 蛭ヶ岳が来

吉 沢一 郎

る峠らしい風景。

H. Baden Pritchard 著 TRAMPS IN THE TYROL 1874

London Tynsley Brothers

のが本書である。 だ。その頃ある古本屋の雑書の中から見つけた 時代が僕にもあった。もう四十数年も前のこと 念に見てまわらんことには気のすまないという 一週間に三回や四回は神田界隈の古本屋を丹

れたかわいそうな本の一つにチロールの文字が う気になった。本棚の下の方に無雑作に並べら のある奴なので片隅にでも並べてもらおうとい 一本展に出すほどの名著でもないが、思い出

を吹きわたる凍てつくような風に抗し鼻水を手 登山風景、反対側の絵はチロールへの道標があ ばりつけた登山者たちが岩にしがみついている 二つ描かれている。一枚は「タッチクライミン てみると、フロントピースに何とも面白い絵が 見えたので、 グ」という題でコウモリガサをザックの上にし 山の本かと思って抜き出し、

開い

って買ってしまった。 古いチロールの模様を知るにはいいだろうと思 いし、また登山ではなく徒歩旅行記らしいが、 著者がどんな人物なのか全然聞いたこともな

関する印象が特に興味深かった。 鉄道記者をしていたため、鉄道やその乗務員に も整備され、鉄道も伸びつつある。その頃僕は ドの制度も出来ているし、ホテルやレストラン らチロールに入り、グロスグロクナーやグロス 余年、黄金時代が終っている頃なのだからガイ いる。グロスグロクナーが初登されてから七十 ベネディガーの周辺ではガイドを傭って歩いて 著者はペデスツリアンではあるが、スイスか

のがこの本の特色かも知れない。 国人らしい文明批評を至るところでやっている チロールの自然の美しさに感歎しながらも英

渡 辺公

三井松男さんの思 出

ー七回忌に当り

ダ・セルカークの山々の登山など 厳しいパイオニア的行動の一方、 初登頂、学生時代単独でのカナ 三井松男さんは地蔵鳳凰の冬期 らを裏書きする山での一面を紹介 っていた親分肌の人でした。それ 音楽を愛し、山梨支部長を長くや します。

尾根にとりつくのです。実はその 岩小屋。北穂沢を上部で横切り東 の後藤宗七、長野清一両氏によっ 現吉君と私の三人で穂高へ入った たのです。根拠地はいつもの横尾 私達は東尾根から北穂高を目指し て北穂高は初登頂されていたが、 時でした。その前年の一月、先輩 二年ほど前、北岳の大樺沢で大雪 昭和七年一月、三井さんと谷口

金 山 淳

るので、雪崩には極度に注意を払 たせいか、ほとんど渡りおえて振 は沈むが、おれは軽いので浮いて 人一人横切りました。 ん渡りましょう!」とジェスチャ 返り「雪は落着いてます、どんど いるよ!」とバカ口をたたいてい い、三人とも長い雪崩紐をつけ一 崩のため一人の先輩を亡くしてい 私はいつも「雪崩に遭うと二人

がモッソリ乗っかり、それらを払

い落しながら進むため、さらに時

東尾根は細い岩稜に帽子状の雪をか振ったのでした。来ないのでした。来ないのでした。

間を食ってしまいました。この日は珍しく無風快晴、暖気で一月とは思えないような日でした。いよいよ東尾根は終り、コルナなわち北穂高の白ハチマキの始まるところへ来たら、風陰側のためラッセルも深く、重い雪と変っていた。私は軽量なので大したことないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも十九とないが、谷口君は当時でも大した。そして軽量もまたいいもんした。そして軽量もまたいいもんした。そして軽量もまたいました。

した。その辺が三井親分の親分た る所以だったと思われます。 もう一つ紹介しましょう。その 後二、三日して横尾を夜中に立ち ジャンダルムを目指したのです。 天候が特に悪くない限り、毎夜 ての日の天候を判断、進退を決め るのが慣わしでしたが、その日は そのまま進み、穂高小屋には薄明 そのまま進み、穂高小屋には薄明

いますが、小さく、暗く、その日小屋はちょっと想像出来ないと思小屋の穂高山荘からは当時の穂高

のでした。

しまいました。

行きましょうや。ジャンダは大丈う。ここでゆっくり食事でもして

夫登れますよ」と軽くいなされ

半分開けられた入口から真先き

見物とシャレ込んでいました。そ

して二人がやっと登って来た時

「さあ、三井さん。リーダーは先

に飛び出して来たのが、名山案内に飛び出して来たのが、名山案内た。今日はこれからジャンダを越た。今日はこれからジャンダを越た。今日はこれからジャンダを越た。今日はこれからが来して来ました。今日はこれからが

のだ。ジャンダは当時、未登峰で尾から六時間もかけて登って来た尾から六時間もかけて登って来た

影響されていたことは確かです。 に行って下さい。あと十メートル に行って下さい。あと十メートル に行って下さい。あと十メートル に行って下さい。あと十メートル に行って下さい。あと十メートル に行って下さい。あと十メートル

それに三井さんは後輩の私にも

いつも「さん」づけで呼んでいま

そこで三井さんに「彼らはまだ登頂されてはかなわない。 大学山岳部がみんなねらっている

住度中です。私達は休まず奥穂へ 登りましょう。彼らがいくら駈足 で追って来たって、馬の背やロバ の耳で追い越すことは 出 来 ま せ ん。彼らが縦走するんなら、こち らはせめて、ジャンダだけはいた だきましょう!」と強く迫ったの です。

ら登って来た。天気ももつでしょ ので、いつも自分の考えをあから ですが、その点三井親分とは対照 がで、いつも自分の考えをあから ですが、その点三井親分とは対照 がですが、その点三井親分とは対照 がですが、その点三井親分とは対照 がする。 が、たの点三井親分とは対照

こんな具合で、ジャンダの初登には加藤泰安氏となり、私達は第二登となってしまいましたが、思えば三井さんの山登りの考え方は、思格のある悠々たるもので、私などのコセコセ登山とは次元の違う

の話より)の話より)

ずるものがあるのではないでしょ

その点、

木暮理太郎先生と相诵

紹介图書

うな気がする。

ヒマラヤ取材記

片山全平著

「『ヒマラヤ取材記』が、全平 はんの処女出版と聞いて意外な さんの処女出版と聞いて意外な 気がした。すでに著書の一、二 無は持っているような気がしていたからである。朝日新聞紙上で、しばしば彼の署名入りの文章を読んで、私は彼の署名入りの文章を読んで、私は彼の清潔な文章に惹かれ、読者の一人にもなっていた。今日まで彼が自著をっていた。今日まで彼が自著を けたなかったのは、多忙な記者 生活のためであったろう、と思われる。彼はすでに十年も前から出来あがったライターであっち出来あがったライターであった。」

き加える余地は残されていないよという書き出しで、瓜生卓造氏とかっており、改めて、これに書となっており、改めて、これに書いたなっており、改めて、これに書いたなっており、改めて、工生卓造氏という書き出しで、瓜生卓造氏

それらの再録されているものが少 や会報「山」への寄稿を通して親 だすのである。 新たに発表された六〇ページにお ラヤ取材記」の九篇など、今回す の二回の紀行から生まれた「ヒマ なくないが、一九六九年と七〇年 しいものであり、この著書にも、 までとは違った片山全平像を見い よぶ「遭難記」などを読むと、 鮮な感じで迫って来る。その上、 かり書き改められたせいか、新 会員諸氏にとって著者 新聞紙上のほかにも「山岳」 0 文章 今

まことに、うかつ千万な話であるが、全平さんというと、関学山岳部時代の活躍のあと、長い新聞生活の間、つねに登山に関する新しい情報を正確に伝えてくれる人としての印象が強かったため、そとしての印象が強かったため、そとしてまた強靭な半面には、この著書を通じて始めて接したような感じがする。

扇に若き命を奪われた次兄・純吉 「昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山 は、昭和十五年一月四日、北大山

描かれて、読むものの胸を打つ。 を感じたかが、抑制のきいた筆で 兄の遭難に会って、悲嘆にくれる 兄を急病で奪われたあと、また次 さらに山への開眼を教えられた長 さんが、四人兄弟の末弟を失い、 の情景である。中学生だった全平 氏の遭難を知らされた折の片山家 一家のなかで、なにを想い、なに 不幸に追い打ちされる家庭の悲

思考の跡を、単純な要約で記すの ている。否応なしに著者は生と 冬の縦走では仲間の一人を失なっ 苦い経験を味い、昭和二十七年の 山から遠くない伯耆大山で何度か 後年に到っても、 考えこむことになる。その切実な 接読みとって欲しいと思う。 は避けたいので、この著書から直 とくに山での死について深く 著者は郷土の津

般は、わたしが四季を通じてよく

展示されている作品の山々の大

なかった。 られたのにと、思わずにはいられ でいたら、もっと切実に受けとめ 葉を、その前に「遭難記」を読ん 行ってきた」という全平さんの言 ぶりに訪れている。「ペテガリへ 加し、次兄の遭難の跡を三十八年 著者は六月のペテガリ山行に参

定価一、二〇〇円 島田

ーナル社刊

四六判三二九ペー

昭和五十三年七月スキージャ

異

ヨーロッパ アルプス

白簇史朗写真集

圧倒され、思わず感嘆の声を発し されている作品の迫力にまったく て、うなってしまった。 会場いっぱいに大型パネルで展示 ンで開催された写真展に出かけ、 立って、わたしは富士フォトサロ この写真集を開いてみるのに先

あろうとさえ思われる。その上、 調和を保ちつつ描かれた例は稀で しみが、これほど主観と客観との

強烈に迫ってくるのはなぜなのだ の山々と相対していたときよりも なのだが、現実にわたしがそれら 知りつくした身近かな山々のはず

を眺めていたよりも強い臨場感を とを痛切に感じ、現実にアルプス 籏氏の作品を見ていると、このこ るものを思うことによって、かえ 覚えた。 って実在感が強まるものだが、白 いて手が届かないとき、その愛す 人は愛するものから遠く離れて

に撮影しているフランス、イタリ の作品をこれまでずいぶん見てき ア、スイス、ドイツのカメラマン たが、白籏氏の作品ほど、 わたしはアルプスの写真を専門 させる必要はないのだ。この点、 ストはまったく登場しない。登場 た作品のほうが好きだ。

また白籏氏の作品にはアルピニ

人物をいっさい入れずに、

アル プ

もので、

本会のみではとても引受

ギー等広汎な環境問題が含まれる

護はもとより、海洋汚染、

、エネル

量感を表現し得た作品に接したこ ンのイタリア側のベニの谷の撮影 ャンチエール小屋と、モン・ブラ た一九七一年に、わたしはアルジ 白籏氏が最初にアルプスを訪れ

をはっきりと認めた。 たじとなった。そこにわたしは真 撮影にかかったときのそのきびし い表情、射るような目つきにたじ にこにこ顔の白籏氏が、いったん 剣勝負を挑む男、真の芸術家の姿

くにわたしは、晴天の山よりも、 ラマンの写真は美しい。しかし、 量感を表出したものばかりだ。と 対峙して、その圧倒的な生命力と ものはない。アルプスと真向から で、迫力に欠ける傾向が強い。 しさだ。とくにカラー作品はそう に撮影しているヨーロッパのカメ る構図だ。従って、アルプス専門 からどこでも絵になり、写真にな それらは絵葉書的な、女性的な美 荒れ模様のアルプスをテーマにし アルプスはたしかに美しい。だ 白籏氏の作品には、そのような

なたたずまい、のしかかるような そびえる巨峰の高度感、 その壮厳 と共通しているといえるだろう。 スイス最大の画家ホドラーの作品 スの巨峰を肖像画のように描いた 具体的に本書の内容を紹介する

だしい、重い器材に驚いてしまっ たが、いつもは温厚そのもので、 に同行して、その携行するおびた る。 作品、一〇四点がおさめられてい ベルニナ、ドロミティの五山群の リス、ベルナー・オーバーラント、 中から、モン・ブラン山群、ヴァ 月にわたって撮影したフィルムの と、白籏氏が前後三回、延べ八ヵ

巻末の写真解説、そしてアルプ

るし、印刷製本も申し分ない出 栄えである。 図、各山群の略図もつけられてい 立つ楽しい文章だ。アルプス全 の制作態度、作品を知る上に役に ス回想の一文は、白籏氏自身とそ

図一一ページ B4判カラー一七六ページ 月一日 山と渓谷社刊 ○、○○○円。昭和五十三年十 ージ 随想五ページ 写真解説二八ペ 定価二

日米民間環境会議78」

7

5)

を催したいという呼び掛けが、本 団体で、山岳活動のかたわら、 十七万人を擁する米国最大の山岳 思うので、この会議についての概 会議が、神奈川県横浜国際会議場 までの五日間、初の日米民間環境 会並びに国立公園協会にもたらさ 本において民間ベースの環境会議 を強力に推進している)より、日 八九二年の創立以来自然保護運動 要だけを述べることにする。 は、近藤信行氏より報じられると で開かれた。この内容に関して 昨年、シエラ・クラブ(会員約 去る七月二十四日より二十八日

れた。その内容は、山岳の自然保 哲麿理事長のご尽力により、 エラ・クラブのクロード・ルック よって組織委員会が組織され、 の会(会員約六万人)の三団体に ブの他、オデュボン・ソサエティ った。米国側では、シエラ・クラ の十三団体が参加して準備にあた や、日山協を含む、自然保護関係 組織合同委員会が発足し、 する78日米民間環境会議・日本側 て、本年初め、茅誠司氏を会長と ていただくことになった。 佐々保雄氏や国立公園協会の千家 られるものではないので、本会の 会議の事務局を環境協会に引受け (会員約二十五万人)、 地球 かくし 本会 この シ 友

会々長、デイヴィッド・ブラウワ ンド・シャーウィン氏、 ・フュトレル氏、同じく、レーモ シエラ・クラブ会長、ウィリアム 氏が加った。米国側としては、 山協会長、佐々保雄氏、村井米子 会よりは、西堀会長、渡辺公平日 麿氏を始め約八十名が参加し、 ー氏他十一名が代表として来日し 、地球友の 元 本

平氏は「日本の登山と自然保護」、 村井米子氏は「上高地と穂高岳を の部会に積極的に参加し、渡辺公 を座長とする第四日目の自然保護 会場には、本会が反対している大 西堀会長がつとめられた。また、 したエネルギー部門の座長には、 問題と同じく、日米が激しく対立 なお、最終日は、第四日目の捕鯨 が上映され大変な反響を呼んだ。 受賞作品「レッドウッドの最後」 作になる全米記録部門のオスカー では、特に、シエラ・クラブの製 読演された。この日の午前の部会 めぐる五八年の変遷」の題の下に れた。本会としては、佐々保雄氏 環境問題のテーマに基いて討議さ 然保護、第五日目はエネルギーと 第三日目は環境法、 環境教育、第二日目は環境汚染、 会議は、 開会式の後、第一日は 第四日目は自

> る山の清掃運動に対して讃辞を呈 ド・ルック氏より本会を始めとす 発表された。なお綜合評価に於て の適当な都市で開催されるむねが られ注目をあびた。会議はとどこ された。 最終日の記者会見の席上、クロー ットレル氏が渡辺公平氏の講演を は、米国側より、ウィリアム・フ 浜の姉妹都市サン・ディエゴか他 が日米両語で発表され、来年は横 おりなく終了し、共同コミュニケ 会議の活動状況のパネル写真が貼 例にあげ、高く評価され、また、

である。 出したのは、三月頃からであっ て、準備期間が短く、全国の自然 今回の環境会議が実際的に動き

のパイプが出来、お互いに意見を って、始めて民間ベースで日米間 あった。しかし、今回の会議によ いだろう。なお近々会議の内容は たことの意議は充分認められてよ 交換し合い、学び合うことが出来 に至らなかったのは残念なことで 保護団体の意向をすべて反映する 冊の本としてまとめられる予定 (鈴木敦之)

海外山岳会情報

T メ IJ 力 0 Ш 岳 団 体

1

グ・レイド

Alpine Club) の誕生となる。 会 (The Mazamas) が北西部で活 Club) が一八九二年に設立、シエ るアメリカ山岳会(The American て一九〇二年、アメリカを代表す 登山運動が全米にひろがり、やが 動を開始したが、こうした一連の し、一八九七年にはマザマス山岳 ラ・ネバダの山々を精力的に開拓 は、シエラ・クラブ (The Sierra リカ東部の山々を探険し、西部で して一八七六年に設立され、アメ メリカで最も歴史の古い山岳会と palachian Mountain Club)が、ア アパラチャ 山岳会 (The Ap-

者の喚起を呼んだ。同じく、

の猪俣浩三氏の主催する新潟ゴミ

アメリカ山岳会(The American

〇二年、

術の訓練をするというようなこと

集会は行うが、会員に技

しない。会長は、ジェームス・

は

全米で一三五〇名、

純粋なクラブ

ニューヨークにある。会員数は、 Ridge (1975) の九つで、

状況を本会々員田村聡明氏が撮影

峰・白川又川流域村道建設の破壊

されたパネル写真に掲示し、参会

Alpine Club) York 10028 USA E. 90 th Street, New York, New ーク市東九○番街一一三番地 113 本部:ニューヨーク州ニューヨ 鈴 木 郭 之 そ の

点に初到達したピアリー

を作り、アルプス的登山を標望し 教授(Prof.Charles E. Fay)や Abbot) や、チャールズ・フェイ うちに、気運が次第に高まり、一九 た。このような登山活動の推進の ムバーがアパラチャ山岳会の支部 チャールス・トムプソン(Charles フィリップ・アボット (Phillip 本格的な登山活動を開始 四五人の岳人が彼等の呼 等の強力な七人のメ Mountaineering 探険の英人シャックルトン(Sir ガン峰登頂の成功である。 この年代でのハイライトは、 Mountaineering ープの結成を促した(Harvard った大学に働らきかけて登山グル る。またハーバードやエールとい ナダで数々の初登頂をなしとげ AAC のメムバーは、合衆国やカ 動はにわかに活況を呈してくる。 た。一九二〇年代に入ると登山活 Ernest H. Shackelton) 等であっ jalmur Stefansson) Club)° Club, しかし п | Yale

Thompson)

ち六人までも 極地探険家 で あっ 行われ、一九一二年の年次晩餐会 織を結成した。チャールズ・フェ び掛けに応じてフィラデルフィア Peary) やステファンソン (Vilh-た。即ち、コロムビア岬から北極 に出席した一二名の名誉会員のう 極地探険も登山と同じく積極的に Muir) 等は初期の役員であった。 者、ジョン・ミューア (John Reid) や、シエラ・クラブの創設 山家のヘンリー・フィールディン 名が見られる。また地質学者で登 ム・ヴォー (William Vaux) ント (Henry Bryant) やウィリア キーで有名なヘンリー・ブライア ーの中には、カナディアン、ロッ カ山岳会が誕生した。設立メムバ イが会長に選ばれ、ここにアメリ に集り、ハイ・レベルの登山の組 (Henry Fielding や、また南極 (Robert 0 バードソル(A.L. る。即ち Sierra Nevada(1947年 岳会は現在九つの支部を有して す。またソ連やポーランド等と交 purna III)等、九つの遠征隊を出 giri)、アンナプルナⅢ峰(Anna-する K2、その他 ヒマルチュリ 等、輝やかしい記録を残した。一 シャブルムI峰 (Gashabrum I) 登以来、一九五八年、 Alaska (1968)' New England Mountaius (1954) 'Southern Cali-設立)、Cascade (1948)、 換登山を行っている。アメリカ山 プルバ・ドゥナギリ Purba Duna-(Himalchuli)、ノシャク(Noshag) 頂上に立ったジム・ウィッテッカ 九七八年には、トム・フォレスト ムーア (T. Moor) によるミニヤ (1973)' New York (1973)' Blue fornia (1963), Oregon (1963), (Annapurna I)、エベレストの 女性のみによるアンナプルナー ブラム (Arlene Blum) ム (Ama Dablam)、アーリン・ (Tom Forest) 隊のアマ・ダブラ (Nicholes B. Clinch) ・ガンカ (Minya Gonkar) への遠征も盛んで、 (Jm Whittaker) をリーダーと Burdsall) クリンチ 九三二年、 の率いる 隊のガッ Rocky の初 P 峰

400-1978 · 10 · 20 (第三種郵便物認可) Ш

れ、毎年選挙はあるが、任期は三 事で構成される理事会で 運営さ であり、各支部から選出された理 副会長は、ジョーゼフ・マーフィ - • Jr. (Joseph E. Murphy, Jr.)

ヘンリオット(James F. Henriot)

ている。 tion d' Alpinisme) の一員となっ 年である。また諸活動はそれぞれ の委員会によって行われている。 (Union Internatinal des Associa-アメリカを代表して世界山岳連盟

知 6

す。詳細は後刻ご通知します。 王プラザホテルでおこなわれ (土)、昨年と同じく東京新宿の京 今年度の年次晩餐会は12月2日 ま

年次晚餐会12月2日

【出品要領】 協力をお願いいたします。 一本展」を開きます。ご出品、ご 年次晩餐会の折に今年も「この 「この一本展」のお願 V

など「この一本」と思われるもの。 お持ち帰りいただく。 一、晩餐会当日持参し、展示後の 一、山に関する珍本、稀本、署名本

知らせ、お送りください。 でに、日本山岳会図書委員会宛お など四○○字二枚の解説添付。 、出品内容と原稿を11月10日ま 、出品作品についての故事来歴

、原稿には、出品図書の、書名 を明記してください。 著者名、発行所名、発行年月日

会員名簿配布

ようやく会員名簿が出来上り、

名簿の正確を期するため、 点は事務局までご連絡願います。 ろもあると思います。お気付きの まして、ご迷惑をおかけしたとこ 連絡下さいお願いします。理事会 の変更があった場合には、至急ご 部脱落や誤りなど校正もれがあり 会員各位にご送付しましたが、一 住所等

関としての性格を打ち出す予定。 後は会議本来の目標である研究機 従来のような全体会議を終り、以 HKTは今回の第10回大会で、 カラコルム会議の開催

橋4-5-2平岡誠一郎方HKT ムランド内夢のホテル 申込み 〒16東京都世田谷区船

グに避難小屋(Grand Teuton

AAC は、ムース・ワイオミン

横浜市戸塚区横浜ドリー 12月9日、10日

各山岳連盟にあり。事務局(平岡) 電話は33-22-11七七(夜間)、 または33-86-二一〇一(昼) 申込用紙は事務局、HKT委員 会費 会員一万二〇〇〇円

に、何か問題が生じたとき、調停 や、森林局、または地主達との間 る。その他、登山者が国立公園局 ル七五セントで一夜を泊めてい Climbers Ranch)を経営し、一ド

オーシャン、イチビキ、伊奈製陶、 三越、キャラバン、ヒマラヤ、三楽 三井造船、麒麟麦酒、サントリー、 紅、日商岩井、富士写真フィルム、 三井物産、三菱商事、住友商事、

本碍子、大原鉄工所、日本通運

にもあたっている。

第10回ヒンズークシュ・ お せ は、一五ドル、一般年会費は二五 ていなければならない。入会金 に、入会希望者は実際に登山をし ず、更に、そのうちの一人と一緒 た確固たる登山家でなければなら

ing"という題で、 ドルである。本部の建物の一階は が詳細に記されている。 ダの事故の統計や、その救助状況 North American Mountaineer-クな出版としては、"Accident in ドブック等を出している。ユニー 六、九、一二月の年四回や、ガイ American Alpine News & [1] を発行している。 この他に The American Alpine Journal(年刊) る。出版は、一九二九年以来 The ーとシャトルに支部と図書室があ 集められている。この他、デンバ 室であり、約一万冊の山岳図書が 集会場となっていて、二階は図書 北米及びカナ

する登頂を含んでいることが望ま しいとしている。また二人の保証 経験を有し、高度の技術を必要と い。入会希望者は三年以上の登 人を必要とし、その保証人は AAC AAC の入会は比較的むず

の会員か、或いは内外で認められ (東京の部) なし

申込人員 東京 五九九名 去る六月退会のため取消) 金五、九〇一、五〇〇円

◎なお、お申込みをいただいたまま れます。個人別に通知状を出して おりますがこの際是非お払込み下 の入金なき方が、まだ十数名おら 入金なき方、また分割払込みで後

の銀行預金口座を八月末で閉鎖いた 第一勧業(新宿西口)、協和(神田)、 法人募金のためにもうけました左記 安田信託(新宿西口) 太陽神戸(新宿)、住友(新宿西口)、 (新宿)、富士(新宿)、三菱 (新宿)、 三井(新宿)、大和(新宿)、東海 しました。 二菱信託(新宿)、住友信託 (新宿)

ーム基金応募者

図書室募金報告

(昭和53年9月日現在 敬称略·順不同

(2)高橋憲二(1)稲永篤、田口善信 (地方の部) 一口五千円 数字は口数 既報分に一口一名重複あり、訂正) 累計 五九九名 一一五一・九口 金一一、五一九、〇〇〇円

、既報分渋屋博敏一口入金なきまま 累計 五三二名 一一八〇·二口 大累計金一七、四二〇、五〇〇円 四名 金三五、〇〇〇円 地方 五三二名

さるよう願います。

ご芳名 $\widehat{14}$

不動産、新日本製鉄、日本鋼管、 力、九州電力、北海道電力、松下電 日本放送協会、テレビ朝日、東京放 聞社、中日新聞社、信濃毎日新聞 用銀行、北海道拓殖銀行、北洋相互 三和銀行、協和銀行、大和銀行、住 会、フジタ工業、大日成建設、三井 器産業、シャープ矢理工場、東京瓦 菱自動車販売、日本電装、矢崎部 トヨタ自動車工業、日産自動車、三 本社、平凡社、旺文社、成美堂出版、 溪谷社、講談社、集英社、実業之日 ジョン、白水社、大修館書店、山と 送、日本テレビ放送網、フジテレビ 社、西日本新聞社、北海道新聞社、 品協会、朝日新聞東京本社、読売新 険、東京医薬品工業協会、大阪医薬 証券、山一証券、日興証券、大和証 安田信託銀行、中央信託銀行、野村 銀行、三井信託銀行、三菱信託銀行、 友銀行、日本興業銀行、日本長期信 崎製鉄、住友金属工業、日本石油、 斯、大阪瓦斯、日本建設業団体連合 上げます。(順不同・敬称略) きました。社名を掲げ厚くお礼を申 一社から合計金一三、四七〇千円 (目標一千万円)のご寄附をいただ 不況時にもかかわらず、左記八十 東京電力、 三井生命保険、安田火災海上保 関西電力、中部 電



第五回大佛次郎賞受賞近藤信行著『小島烏水』

去る五月に発行された近藤信行氏の労作『小鳥鳥水 山の風流行氏の労作『小鳥鳥水 山の風流行氏の労作『小鳥鳥水 山岳会のみならず日本山岳界の山岳会のみならず日本山岳界の生涯を克明に跡づけたこの作品は、各新聞、雑誌の書評欄でいましたが、今度の受賞によって、その評価は決定的にとりあげられていましたが、今度の受賞によって、その評価は決定的になったといえましょう。

歴代会長の写真

??アイゼンよ、出てこい! 起人七氏と、歴代会長の写真が 〒二四〇一一 佐藤テル 郵送着払いでお送りください。 でアイゼンが行方不明になりま ました。その他未整理の資料等 新しい額に収められて掲出され ムの一隅に、日本山岳会創立発 れてきていますが、先頃、ルー 万一間違って持帰られた方は、 確認しましたがいまだに不明。 道支部と同行の諸兄姉には再三 ス登攀の折の貴重品です。北海 した。佐藤久一朗氏欧州アルプ も順次整理される予定です。 神奈川県葉山町一色一六一 去る6月16日、ペテガリ山荘 新ルームも日を追って整備さ

アルプスの旅から会員通信

本年八月十五日にブリエンツ・ロートホルンに参りました。八月十三日にはグリンデルワルトからフィルストへ行き、むかし、槇様や麻生様が泊まられたホテルのお嬢さんにお会いして麻生様からのメッセージをお届けしました。夫人は非常に喜ばれ、槇様、麻生様にくれぐれも

した。表口は例の町工場のようトのベントの店も目下増築中で

たと思います。グリンデルワル山の町らしい姿のほうが良かっつのを見ますと、やはり以前のしかし大きなホテルが次々と建いないことは羨しい限りです。

東西南北

写真をうつさせて頂いてお別れ 写真をうつさせて頂いてお別れ し、先日模様宛にその写真をお をお伝え申上げ、夫人からのご挨拶 をお伝え申上げ、夫人からのご挨拶 をお伝え申上げ、夫人からのご挨拶 をお伝え申上げたところ、早速 ご丁寧なお葉書を頂戴致しまし た。ツェルマットでも麻生様か らのメッセージをお届け出来ま して無事に役目を果せました。 なお、私自身もブリエンツでザ イルを組んだガイドと会えまし て夕食を共に出来ました。

くなったような気がいたしま す。それでも町があまり汚れて ャモニもツェルマットも町が狭 客がふえたためでしょうか、 ているように思いました。観光 タイルで山を歩いている婦人達 ました。シャモニではビキニス ランも一方の湖は青氷にとざさ が多かったようで、ラック・ブ 晴でございました。例年より雪 ニの三日間もモン・ブランは快 河が今年は町のすぐ上まで延び を多数見かけました。ボソン氷 わぬ雪滑りをして楽しんで参り れておりました、湖付近では思 今夏は好天に恵まれてシャモ シ

> アパラチヤ山岳会(The Appalachian Mountain Club) 本部:5 Joy Street on Beacon

訓練が行われている。 の山の中での活動の中心地とな Camp) は、一番大きく、 AAC 現在は九つの山小屋と二〇の避難 学を勉学する学生に補助を与えて その他数多くの貴重な地図や写真 心者からリーダー級までの教育や り、ここで集会が行われたり、初 ム・ノッチ (Pinkham Noich Base ている。この小屋の中で、ピンカ 小屋並びに多くのキャムプを有し 避難小屋を建てたのが始めてで、 スプリング (Madison Spring) に いる。一八八八年、メディソン・ 七年 Murphy 奨学金を設立、森林 では一〇の支部を数える。一九五 来、次々と支部が結成され、 も集められている。一九一二年以 室には七〇〇〇冊の蔵書があり、 ークに集中している。本部の図書 ニュー・イングランドやニューヨ 現在会員は二万人を数え、主に Hill, Boston 今日

出版は、一八七六年創刊の Appalachia (年刊)や、年一一回発行palachia Bulletin の他、地の Appalachia Francisco, CA 94108
San Francisco, CA 94108
シエラ・ネバダの山々を歩き廻 シエラ・ネバダの山々を歩き廻 シエラ・ネバダの山々を歩き廻 シエラ・ネバダの山々を歩き廻り、その景観をこよなく愛したジリ、その景観を記している。

中心に、ヨセミテ(Yosemite)の中心に、ヨセミテ(Yosemite)の北図や、本を作ったカリフォルニヤ大学のル・コント教授(Prof. Joseph Le Conte)等二七人が、一八九二年六月四日に集り、シェラ・クラブを組織し、ジョン・ミューアが初代会長になった。このミューアが初代会長になった。このミューアが初代会長になった。このミューアが初代会長になった。このミューアの精神を代々受けつぎ、シエラ・クラブは、アメリカでも有数な自然保護運動で数々の功績をあげている。

は外国にもむけられた。日本にも tains of California" やルコント のパターンとなった。この Outing ビー (William E. Colby) が第一 たって訪れ、山歩きをしている。 いたりした。このような Outing 作用と地質変化といった講議を聞 史、あるいは、ミューア自身の氷河 dor Hittel) のヨセミテ地区の rian)の鳥と動物、ヒッテル(Theo-(Prof. W.R. Ruddly) の森林学や ンフォード大学のラッドリー教授 Sierra"等の書物を読んだり、スタ その後のシェラ・クラブの Outing 回の九六人からなる団体の山行 に先だって、ミューアの "Moun-三〇人位の団体で、 メリヤン博士 (Dr.C. (Outing) を企画し成功、これが またシエラ・クラブの呼びかけ "Ramblings through the High 一九〇一年・ウィリアム・コル アメリカの自然保護団体が来 過去三回にわ Hart Mer-

なままでしたが、だいぶ大きく なるように見受けました。 (筈見愛子)

を控え、侵触により岩の景観み を試みたもの。当地は富戸漁港 から、趣向を変えて海辺の集い 恒例により例会を休みのところ で有志懇談会を開いた。八月は 便り① 三水会 八月五日、伊豆の城ヶ崎海岸 (有志懇親)

ごとな東海岸の景勝地。

沼倉さんのご尽力により関係

ら一夜を過ごした。片岡博さん 等海の幸に舌つづみをうちなが まい」の連発。 幾雄さん、浜田一馬さんも「う 理に腕をふるい、先輩格の河野 は山菜の先生と思いきや鯛の調 エ、それに新鮮な魚介のさしみ きたばかりのシッタカ貝とサザ 両人と地元の方が海からとって ガローを開放していただき、ご 会社の古田さんのご厚意でバン

雰囲気におおいに意気投合した とは山岳会の本旨ではなかろう 長の山本(朋)さんも三水会の がら、水辺よし、酔(すい)も の楽しさとともに、自然と味、 よしとの談義も飛び出し、山行 人との多彩な交わりを楽しむこ 話ははずんだ。地元静岡支部 酔うほどに、三水会の名まえ 会の歴史もひもときなが

さん、高田真哉さんが参加。 ようだった。 ひきつれた子連れ狼の坂本正知 ほかに山の二世を

間から畏敬、親しまれていた。

ていた。

彼の驚異的行動力は仲

(岩堀瑞子)

穂高とのつきあい 三水会便り②

講師 折井健

異色の辰巳柳太郎氏(新国劇) ぞかせた田舎の青年に驚かれ、 こうのと花を咲せる浜口氏に合 嚴根氏(長銀相談役、元浜口首 との出合いもまことに珍しい。 大きい。山に魅かれ長滞留する と名のる折井さんの存在価値が かつ感心された当時学生岳部員 相子息)が、シェンクがどうの をきくことはうれしい。穂高小 いづちをうち、博識の一端をの たまピッケル談義に入り、浜口 舎で重太郎氏と山を語り、たま い」されている折井さんのお話 大正十二年に「穂高とつき合 昭和8年~10年にかけて、当 私たちの仲間より一年早く、

者であった。一見粗野の感じの 苦心談はまことに興味があっ 思いをかけ、 彼は心にくいほど後輩には一層 をリーダーに滝谷ルート開拓の 時のスーパーマン出牛陽太郎君 たち塞り私たちをよくリードし な困難なことでも恐れず、率先 た。出牛氏こそ忘れがたい指導 せん細なところがあり、どん 大胆にしてまこと

活後間もなく他界されたことは ちこんでいた。彼が長い学生生 彼は一年のうち十三ヵ月は入山 あったに違いない。 ってもかけがえのない山岳人で 本当に惜しい。日本山岳界にと なっていたほど、山に青春をう しているやつと私たちの評判に

の流儀のかんろくと声量には充 かかる。さすがと思われる、そ たえた婦人こそ当代随一の名取 居合せた婦人が氏から安曇節を 露される。その当時穂高小舎に 節の所望に応え、その正調を披 れるまま折井さんは得意の安曇 た三水会であった。 当日御出席の今井さんにも声が の今井喜美子先生であったこと のに師の折井氏が驚き、ほめた 手ほどかれ、難なく歌唱される 分に堪能する。静かな落ちつい は今に恐縮している。たまたま 話はなかなかつきない。

片岡博、勝田、沼倉。 坂倉、長谷川恒男、 岡野谷、木村(俊)、 宇津、菅野、高田、今井(喜)、 金坂、関塚、森川、小林(重)、 本(正)、高沢(札幌)、近藤(信) (出席者) 講師折井健一。 斎藤(桂)、 池田(智)、

(沼倉寛二郎)

Sierraを毎月発行している。特徴 組織している。会費は一般会員年 の支部、二三七の地方グループを ブの会員数は、約一五万人、ニュー が七月に横浜で開催された。クラ あるのは、資金財団シエラ・クラ ヨーグその他に一○の支局と四九 ブ・ファンデーションの資金によ 二〇ドルであり、機関紙として 第一回日米民間人環境会議

視を続けている。 境保護の為のスペシャリストを擁 の計画や実施と並んで、多くの環 勝訴している。即ち自然探険旅行 りな行政訴訟をおこし、しばしば Legal Defence Fund) が設けら し、公害規制を含む環境行政の監 れていて、国を相手にして大がか ブ法的防衛基金 って運営されているシエラ・クラ (Sierra

高 所 登山 研究会

ます。 参集下さいますようご案内いたし 容を盛りこんでおります。多数ご 報、将来の展望など、興味深い内 開催します。海外登山の最新の情 左記要領にて高所登山研究会を

標題『EXPEDITION』 一海外登山の現状と将来 昭和53年11月11日(土)

午後1時~同7時

坂見付下車。 砂防会館前) 1 8 2 5 ル3階三〇三号 千代田区平河町2-6-4海運ビ 入場料 場所日本海運クラブ(東京・ 無料 地下鉄永田町または赤 T E L 03 - 264 - 1

<プログラム> 資料代 約70人(先着順)

1、海外登山の動向 2、K2隊の組織づくり ヒマラヤの岩壁登山 (ダウ

> お 知 6 せ

連続登攀 ラギリ・サウスピラー) 4、プレ、ポスト八〇〇Om

北極隊の記録映画) m 峰 5、メスナー 6 ヒマラヤから極 の三つの八〇〇〇 地へ 日大

7、ヒマラヤのビッグ・ウォー

8 9、質疑応答 高所順化

9で参加者と意見の交換をおこな イド、映画などを用いて説明し、 ・1~8までは講師が図表、スラ

もので、各講師が執筆、 もしれません。 実したものです。 もので、各講師が執筆、内容の充・資料内容はプログラムにそった ・プログラムは一部変更されるか

恒例の忘年会(集会委員会・婦 下年会は12 月14日

●図書受入報告

図書委員会 洋書 (昭和52年12月~53年2月) 購入分

- C. Alliston, "In the Shadow of Kinabalu", Adventures Club, London 1963
- 2. L.S. Amery, "Days of Fresh Air", Jarrolds Publishers, 1939
- 3. L.S. Amery, "The Rain and the Sun", Hutchinson & Co., London, 1946
- 4. G. Band, "Road to Rakaposhi", The Travel Book Club, London, 1940
- 5. M. Banks, "Rakaposhi", Secker & Warburg, London, 1959
- 6. A. Blackshaw, "Mountaineering", Penguin Books, 1968
- 7. J. Boell, "High Heaven", Paul Elek Therty-eight Hatton Garden, 1947
- 8. W. Bonatti, "The Great Days". Victor Gollancz, 1974
- 9. C. Bonington, "I Chose to Climb", Victor Gollancz, London, 1973
- 10. G. Brinley, "A Way to the Canadian Rockies and British Columbia", McClelland & Stewart, London, 1938
- 11. L.D. Brongersma, "To the Mountains of the Stars", Hodder & Stoughton, London, 1962

- J. Brown, "The Hard Years". Victor Gollancz, London, 1972
- 13. C. Brunning, "Rock Climbing and Mountaineering", Faber & Fraber
- 14. J. Card, "Trailing through Siberia", The Travel Book Club. 1939
- 15. E. Candler, "On the Edge of the World", Cassell & Co., 1919
- 16. F.S. Chapman, "Memories of a Mountaineer", The Reprint Society, London, 1945
- 17. F.S. Chapman, "Living Dangerously", Chatts & Winders, London, 1953
- S. Clark, "The Puma's Claw", 18. The Adventure Club, london,
- 19. S.N. Coleman, "Volconoes-New and Old", Museum Press., London, 1949
- 20. E.C. Engel, "They Came to the Hills", G. Allen & Unwin, London, 1952
- 21. N. Farson, "The Last World of the Caucasus". Doubleday & Co., New York, 1958
- 22. R. Frizon-Roche, P. Tairraz, "Mont Blanc and the Seven Valleys". Nicholas Kave. London, 1961
- J.C. Frémont, "Report of the

- Exploring Expedition", Gales & Seaton, Washington, 1845
- 24., 25. Sven Hedin, "Trans Himalaya", Bd. 1 & Bd. 2, S.A. Brackhaus, Leipzig, 1909
- 26. M. Jackson, E. Stark, "Tents in the Clouds", The Travel Book Club, London, 1957
- 27. C. King, "Mountaineering in the Sierra Nevada", Sampson Low, Marston, London, 1874
- 28. C. King, "Mountaineering in the Sierra Nevada". Adam & Charles Black, 1947
- 29. W.T. Kirkpatrick, "Alpine Days & Nights", G. Allen & Unwin, London, 1932
- J. Lubbock, "The Scenery of Switzerland", McMillan, London, 1896
- 31. H. Merrick, "Savoy Episode", Robert Hale, London, 1946
- J. Mills, "Airborne to the Mountains", Herbert Genkins, London, 1961
- 33. D. Munday, "The Unknown Mountain", Hodder & Stoughton, London, 1948
- 34. H. Nunlist, "Spitsbergen", Nicholas Kaye, London, 1966
- 35. T. Paynter, "The Ski and the Mountain". Hurst & Blackett. London, 1954

月14

日

金

懇談会共催)

を左記によりひ

まで休室とする 員休養のため8月12

日~18 日

沢健一氏に 支部長交代の件 ム休室に

一氏より西

1

A 日

(53年6月)

(説明

ルム登山隊推薦状态 大谷氏

嵯峨野理

金越鈴

会 務 報

月10日午後6

デアのある三〇〇円程度のもの) 手紙をそえてご用意ください。 出席の方はプレゼント 日 12 1000円 本山岳会 ルーム

21 20 19 14 13 12 日日日 H 日 日 日 日 永 灭 月 月

理事会 婦人懇談会研究会 会津の山を語 婦人懇談会委員会 凶書委員会 山菜写真交換会 果会委員会

北海道支部創立10周年記念山行

山岳編集山の歌教会 る予定 山岳」第73年は11月末頃出来上 一の歌教室の開催を秋に予定 シャ

ブとの交歓会を開催 月20日ルームでシエラ・ 日第2回ノミの市

24日~28日 一九七八日米民間環境会議7月 の要望を再度提出 アラスカ遠征隊6月28日帰国 15日 (20日) 夏山診療所を7月20日より8月

春先の利用者少ない 光光徳小屋で歓迎会を開く 山岳連盟より来日の (小倉)

(10)

26 日 29日 (木) 슾 月 今月の来室者 三四三名 青年懇談会委員会 集会委員会

7 日

金

図書委員会 海外連絡委員会

4 日

少

26 日 月

自然保護委員会 婦人懇談会研究会

ルーム日誌

(53年7月)

22 日

(未

退会者

五九五〇 八〇五三 五二八五 森山 忠太郎

> 25 日 20 日

火 (未

二三九 物故者

五一二七 大阪市立大学山岳部 100011 代表者変更 町田 代表 原田 伴彦 立穂(53・6・1)

員

19 12 10 日 日 日

婦人懇談会研究会

分 永

三水会

シエラ・クラブ集会

月

理事会

今月の来室者

談会研究会 青年懇談会 婦人懇談会

婦人懇

四一四名

会員移動

五九七四 退会 高千穂商科大学山岳部

四九四八 徳永 登喜雄(6月30 (6月20日)

もようやく四〇〇号。本業のかた わらで意あって力及ばず、各位に **<編集から>** 毎月あえぎながら

昭和五十三年十月二十日発行 ご協力を願いあげます。 サンピュウハイツ四番町東京都千代田区四番町五―四 (大森)

が骨身にしみる昨今。ますますの 手や北極その他、記録の持つ重さ ご迷惑をおかけしています。王選

編集代表大森久雄発行者西堀栄三郎 法社 人団 東京都港区赤坂一丁目三番六号 振替口座東京三一四八二九番 電話東京(26)四四三三 日本山岳会 株式会社

発行所

(11)

登山・スキー用具専門店

山の店

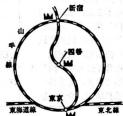
大阪市北区梅ケ枝町101 TEL. 06(362)5736

●買い易い 山の店

- ●北へ来たら 山の店
- ●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店

東京都文京区湯島3丁目38-9 片桐 盛之助 電話 東京(831) 1794·6680番



店 東京都新宿区三栄町三番地 TEL (351) 7432-1912 八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五 TEL (271) 1560-8575 新宿ステーションピル四階 ーピスショップ E L (352) 6 5 6 4

日本信販加盟店

信用と知識を売る

中央区八重洲 2の1の11 R281-8456

山の専門店



山友社をかはこ

登山とスキー具



東京都中央区日本橋通2-1 PHON; 271-7686 · 1718



山の本

売場ご案内

最新入荷の本・報告書

中コーボルト(山形高等学校、山形大学山岳 部同窓会) コーボルト会 2,500円

- 中東ネパールの登山と調査(千葉大学東ネパ ール学術調査登山隊) 千葉大学ヒマラヤ委員 会 1,000円
- 中ベルクシーロイファー (No.3 & No.4スキ ーアルピニズム研究会)850円
- 中アラスカ(ディッキー峰、バリル峰登頂、 およびルース氷河周辺試登と偵察) 1976年、 東京白稜会 700円
- 中登山実技教本(日本山岳協会)700円
- 中登山指導教程 I (日本山岳協会) 1,200円
- 中山恋いの記(村井米子)1,300円
- 中画文草木帖 (鶴田知也) 980円
- 中山みちで花に逢う日は(川口邦雄画文集)2,200円
- 中西域をゆく(井上靖、司馬遼太郎)1,200円



楽しさ 主な が眺め 法 わる 一夜 ケ本木 ほ山森平戸 ヶ尾 助 山山山山山岳山岳山山岳山伏

て行の知 図られ でて頁 、 数こぎ、 ない山 方真一六 馳の七 ると 3

西 望月

刊

画101 東京都千代田区神田駿河台2-1 電話03-291-9442 振替東京8-24723 ●お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。